石神遺跡の調査（飛鳥藤原第122次）

石神遺跡は7世紀代の遺構が重層的にみつかっている遺跡で、特に斉明朝（655～661）の建物群は飛鳥の迎賓館と考えられています。今回の調査は建物群の北限を区切る溝と塀のさらに北側の状況を解明することが目的で、2002年7月からおこなっています。

調査区の下層、斉明朝以前はほぼ全面が沼のような低湿地で、ここが施設の外であることを示しています。天武朝（672～686）のころには一部を整地して、調査区中央は池状、あるいは幅の広い溝になっています。藤原宮（694～710）のころには調査区東側に道路と幅4m、深さ1mの大きな素掘りの南北溝が通り、中央には石敷と井戸がつくられました。

遺構の数は少ないのですが、土器、木器、木簡など多量の遺物には目をみはるものがあります。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部　冨永里菜）

石神遺跡の木簡

石神遺跡から多くの木簡が出土しましたが、

（表）乙丑年十二月三野国ム下評

（裏）大山五十戸造ム下ア　□人田ア児安

と書かれた木簡には驚きました。乙丑年は天智4年（665）にあたります。近江遷都以前の古い木簡です。「ム」「ア」は「牟」「部」の略字。「ツ」も片仮名ではなく、「津」などの略字であると考えられています。評（コホリ）は後の郡、「五十戸」（サト）は後の里のこと。「国－郡－里」という律令時代の地方行政組織の前身が、すでに665年段階で整っていたことを示した木簡です。『日本書紀』によれば、646年の「大化改新詔」で国郡里制の整備を指示しています。しかし『日本書紀』の「改新詔」の部分は後世の知識によって改変されており、その時点で国郡里制が施行がされたと考える古代史研究者はまれでした。今回の木簡で直ちに「改新詔」の信憑性が増すわけではありませんが、再検討は必要となってくるでしょう。

土器の下の木簡を検出中

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部　市　大樹）

藤原宮南面大垣の調査（飛鳥藤原第124次）

2002年10月下旬から12月末まで、高所寺池という溜池の堤防改修工事にともなう調査をおこないました。池の西側を1100㎡にわたって発掘しました。

調査に入ってまもなく、六条大路北側溝が見つかり、その後、藤原宮の南面大垣と外濠も確認できました。いずれもほぼ想定通りの位置での発見です。藤原宮の大垣は掘立柱を土壁でつなぎ、瓦葺きの屋根をのせた構造です。外濠からは大垣に葺かれていたと考えられる瓦が出土しました。

さらに内濠と大垣の間でも掘立柱建物を発見しました。内濠に隣接している柱穴が内濠を壊さないように配慮して掘られていることから、この建物は内濠と併存していた可能性が高いと考えます。

一方、外濠と六条大路の間は空閑地と推定されています。今回の調査でも藤原宮と共存するような遺構は確認できませんでした。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部　小谷徳彦）

遺構全景（北から）

中国・遼寧省における遺跡の調査と研究についての講演会

2002年10月26日に、中国・遼寧省における遺跡の調査と研究について講演会を開催しました。演者と演題は、遼寧省文物考古研究所副所長・方殿春氏「査海文化における社会・経済形態―中国北方における農業の起源―」、同研究員の梁振晶氏「2000～

2001年度における石碑地遺跡の保存と復元」、同研究員の孫立学氏「恵寧寺について」です。当日は、研究所外からも多くの参加者を得ました。普段は目にする機会の少ない中国東北地方における遺跡の調査研究をスライドで見ることができ、充実した講演会となりました。

この講演会は、遼寧省文物考古研究所と奈良文化財研究所が「日中古代墳墓副葬品の比較研究」というテーマで進めている共同研究の一環です。毎年、３～５人程度の研究員がお互いの研究所を訪問し、実際に両国の遺跡を訪れ、遺物を手に取る機会を得ています。講演会は今回が初めての企画でしたが、今後も相互の研究を理解し、公開する場を設けていきたいと考えています。

（平城宮跡発掘調査部　豊島直博）

梁振晶氏による講演

関野　貞の関係資料

奈良文化財研究所は、明治時代の建築史学者である関野貞（1868～1935）の関係資料を所蔵しています。関野貞は奈良県の技師として奈良県の古社寺などを精力的に調査し、現在の奈良の古代建築史学・文化財保護行政の基礎を作った研究者です。また、彼は平城宮・平城京研究の第一人者としても有名で、平城宮第二次大極殿・朝堂院の遺構を発見し、平城宮・京について近代歴史学の立場からはじめて本格的に検討しています。彼の平城宮研究は、学位論文「平城京及大内裏考」にまとめられており、この論文こそが、現在の平城宮・京研究の直接の基礎となっていると言っても過言ではありません。

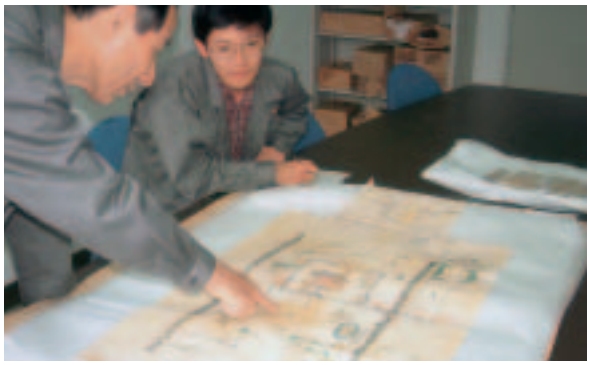
奈文研所蔵の関野貞関係資料は、彼の日記・原稿などです。これらはご子息の関野克氏が所蔵してきましたが、当研究所が奈良の文化財にたずさわっている縁により、2000年１月に氏より寄贈を受けたものです。

現在その関野　貞関係資料を、文化遺産研究部の歴史研究室が中心となって整理しています。整理してみますと、彼が作成した野帳・図面類などに興味深い資料が多くありました。それらは、明治時代における奈良所在の文化財の現状を記録したもので、現在では失われてしまった情報も含まれており、たいへん貴重なものです。

例えば平城宮の現況図は、まだ史跡指定される前の平城宮跡を詳しく記録しています。当時の状況を知る上でも、また、彼の学説形成を知る上でも、またとない資料といえます。

現在、整理作業はまだ緒についたばかりです。今後ここからどんなことが分かるのか、楽しみにしながら少しずつ作業を進めています。

（文化遺産研究部　吉川　聡）



額安寺の明治時代現況図調査風景

研究室紹介

飛鳥資料館・学芸室

飛鳥資料館は、1970年12月「飛鳥地方における歴史的風土および文化財の保存等に関する方策について」の閣議決定がなされ、それに基づいて明日香村に設置されることになりました。1973年に当時の春日野庁舎に庶務室と学芸室が発足し、開館の準備に向けて動きはじめ、閣議決定から５年後の1975年に開館の運びとなりました。開館当時の常設展示は、第１展示室のみで「宮殿、寺院、古墳、石造物、万葉集」のコーナー、高松塚古墳の出土遺物を展示した特別コーナーを設けていました。その後、1981年から発掘調査で掘り出された山田寺東回廊の一部を倒壊以前の形で再現展示するための第２展示室の新設が検討されました。1993年から翌年の６月にかけて増改築工事がおこなわれ、後の1996年になって第２展示室に山田寺東回廊が再現され、現在に至っています。